

Open up the future 2025.1.29



遊びを拡張していくために必要な友達とのつながり

大西教諭の「跳び越そう 自分で選んでステップアップ」のご授業では、子供たちがそれぞれ自分に合った場をつくること、そして子供たちのつながり等について協議がなされました。子供たちが思いや気付きを伝え合いながら知識・技能を高めていくためには、友達と対話する必要性を感じられる授業を考えていく必要があるのではという意見が出ました。そのために、「跳べるようになりたい」という思いをもち、自分の課題を明確にもてるような課題の設定（難易度を上げる）や、着手・着地といった部分に注目し、「より高く」「より大きく」といった視点を追加することなどが挙げられました。また、中学年という発達段階を踏まえ、友達とのつながりが生まれる仕組みをつくるという意見も挙げられました。ケンステップを有効的に使ったり、タブレットを活用したり、自然と対話が生まれる手立てが話し合われました。「遊びの拡張」を大切にされている体育部。ただ楽しむだけでなく、子供たちが課題に向き合い、思考を働かせながら探究していくために必要なことが見えた実践となりました。

図形概念を働かせ量概念を拡張する挑戦

算数科第3学年『「何分の何」を考えよう！～分数～』では、荒井教諭が図形の広さ（図形概念）を切り口に「基準量を1とする」量概念の獲得に挑んだ。導入では、当日まで試作を重ねこだわった4分の1の図形が登場し、「どちらが広いのか？」という問いから、予想を立てたり直接比較する姿が見られた。4分の1の図形という荒井教諭の説明を聞き逃さなかった子どもの中には、「4つ合わせるともとの大きさに戻るのでは？」と考え、班の友だちと協力して図形を合わせて広さの比較に迫った。4人の図形が組み合わせさり、正方形が表れた瞬間、「わかつちゃった！」と歓喜の声が挙がり、すかさず先生に伝えたい思いが膨れ上がった。しかし、それだけで終わっては図形概念。勝負はここからである。いかに2つの4分の1の図形が同じであることを説明するかが概念の拡張を促す。子どもたちの言葉で「そもそも同じ大きさを等分したから…」と「基準量を1とする」ことを言い換えをするA児。「もとの紙の大きさ」に着目したことにより、全体量に目を向けて問題解決を果たすことができた。今後、子どもたちが今回学んだことや見方を汎用的に他の場面・問題解決に活かすことに期待を寄せる実践であった。

